

# 歴史的文脈からみた現代中国の「潜規則」

園田 茂人

先日、「日中対話」と称する会合に参加した。中国側からは政府系シンクタンクの研究員数名が参加し、日本側からは研究者とジャーナリスト、元外交官がパネリストとして参加したが、パネリストのまわりを外務省OBや安全保障関係者が取り囲むという異様なレイアウトだった。

先日、「日中対話」と称する会合に参加した。中国側からは政府系シンクタンクの研究員数名が参加し、日本側からは研究者とジャーナリスト、元外交官がパネリストとして参加したが、パネリストのまわりを外務省OBや安全保障関係者が取り囲むという異様なレイアウトだった。

パネリスト間でのやり取りには特筆すべきことはなかったが、評者にとってびつくりしたのは、パネリスト以外の外務省OBや安全保障関係者が、中国からの参加者を前に一斉に「中国攻撃」を始めたことだった。中国の海軍が不穏な動きをしている、といった程度の話なら理解できる。ところが「中国には三権分立がない」「中国は共産党による一党独裁体制でわが国とは基本的な価値を異にする」

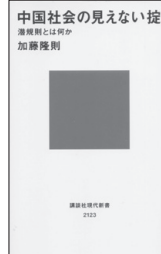
唯一の救いは、中国側の参加者がこうした事態に動揺することなく、うまく対応していたことだが、それにしても、この一方的な批判は何なのだろう。日中関係の現在と未来を考えるべき場所で、一方的に中国異質論を主張するのが望ましい対話のやり方なのか。日本の外交政策に影響をもっていた人々たちから次々に繰り出される対中批判に、正直考えさせられた。

翻つてみると、日本の中国関連書にずいぶんと「反中本」が多いことに気づく。中国の政治や社会がいかにおどろおどろしく、矛盾や混乱、不条理に満ち溢れているかを強調した本がひどく多いの

加藤隆則著

中国社会の见えない掟

潜規則とは何か



新書判 285頁  
講談社 [798円]

だ。

本書も、中国で日々発生している事件——汚職や腐敗、冤罪、言論弾圧、不法逮捕、闇取引など——を素材に、こうした事件がどうして発生しているのかという問いに答えつつ、中国社会が抱える闇に光を当てている点では、「反中本」の一種であるといえる。

\*

第一章「『潜規則』とは」では、本書で「潜規則」——これは「明文化されてはいないが、ある集団内で広範に認知され、明文規定以上に実生活を支配するルール」と定義される——がキーワードとして用いられることが述べられ、この「潜規則」が、儒家や法家の伝統思想に

よって支えられた生活倫理として人びとを動かしており、社会主義の制度よりもはるかに強い生命力をもっている点が指摘される。

第二章以下では、具体的な事件の検討を通じて、中国社会に存在する「潜規則」の内容が紹介される。

第二章「面子は法を超える」では、二〇〇九年に中国中央テレビが北京で起きた花火打ち上げによる火災事故、二〇一一年に温州で発生した高速鉄道の追突事故後の車両の隠ぺい事件、二〇〇八年に発生した上海警察署襲撃事件などが取り上げられ、事件の背後にある、面子を過度に重んじる中国社会の姿があまり出さる。

第三章「冤罪を生む黒箱」では、二〇〇五年の余祥林冤罪事件に焦点を当て、冤罪が生まれる構造——具体的には警察の取り調べにみる強引さや権力者間でのチェックの甘さ、重刑主義の伝統、権力者による自己弁護など——が明らかにされる。

第四章「大事を小事に変え、小事を無にする」では、二〇〇七年に陝西省で華南トラを撮影したという詐欺報道が取り上げられ、罪を農民になすりつけ、これに関与した政府部門の人間が免罪される——そして冤罪を着せられた農民が、最終的に政府部門の「寛大な」対応に浴することになる——法文化が紹介される。

第六章「清官は貪官に淘汰される」では、一九九五年の陳希同・北京市党委書記の解任事件や二〇〇六年の陳良宇・上海市委書記の解任事件を手掛かりに、中国国内で頻発する贈収賄の構造を明らかにする。興味深いのは、特定個人の利益実現のために収賄が利用されるのではなく、その利益が特定のネットワークを通じて配分されており、こうした資源誘

◆天安門を遠く離れ、亡命者たちは何を想う

# 亡命 遥かなり 天安門

翰光

鄭義・高行健・方励・王丹などを現地に尋ね、その後の足跡や祖国への思いの証言を綴った亡命者列伝。



四六判 定価3465円

# 中国朝鮮族を 生きたる 旧満洲の記憶

戸田郁子

「抗日」の記憶が眠る旧満洲の地。聞き書きから歴史を掘り起こし、変わりゆく現在の様相を紹介する。



四六判 定価2625円



岩波書店

東京・千代田・一ツ橋  
[定価は消費税5%込み]

<http://www.iwanami.co.jp/>

導に権力ゲームが随伴しているとする指  
摘だ。

第七章「泰山より重い家法」は、最高  
法律監督機関である最高人民檢察院にお  
ける内部告発事件を切り口に、檢察院内  
部で行われている権力ゲームの様子を活  
写しつつ、司法が政治から独立して正義  
を行使しえない状況を「家法の巨石」と  
いうメタファーによって説明している。

第八章「災難を祭典に、反省を賛美  
に」では、二〇〇八年の四川大地震の際  
にたった一人で逃げ出した教師・范美忠  
に対する世間の風当たりや強さを取り上  
げ、道徳主義が強い風土にあつて個人の  
言論や、時に個人の存在さえ抹殺されて  
しまう「潜規則」のあり方が取り上げら  
れている。

以下、「公と私」の関係をめぐる考察  
を行った第九章「赤信号を渡る人々」、  
頻発する舌禍事件を取り上げた第十章  
「文字には魂が宿る」、権力をもたない一  
般庶民の悲哀を扱った第十一章「魚肉の  
扱いを受ける老百姓」、「解放」と「経済  
」がチベット社会にもたらした歪みを扱っ

た第十二章「国旗は漢族のもの」、中国  
人が抱く外国人への二重心理を論じた第  
十三章「鬼にも神にもなる外資」と続く  
が、あまり具体例を挙げてしまうと本書  
を読む気が失せてしまう方もおられるだ  
ろうから、具体的なケースの紹介はこの  
くらいにしておこう。

\*

「反中本」にも、よい「反中本」と思  
い「反中本」があるだろうが、評者は、  
本書を決して悪い「反中本」だとは思わ  
ない。

第一に、中国国内のさまざまな動きを  
フォローし、筆者なりの配慮と文献や事  
例の咀嚼を通じて記述を進めている点。  
一見すると単純な現象の背後に複雑な動  
きや意図が隠されているものだが、筆者  
はそのあたりに目配りをし、何より直  
接事件の現場を訪れ、関係者の声を聞き  
だしているのがよい。

第二に、こうした「潜規則」の存在を、  
日本からの視点や筆者自身の価値から一  
方的に断罪するのではなく、なぜこうし  
た「潜規則」が存在しているのか、何よ

りこうした「潜規則」の存在を今の中国  
を生きる人びとがどのように考え、日常  
的な生活の中でどのように理解し、受け  
入れ／拒否しているのかについても注意  
を払っている。

第三に、この点が本書の最大の特徴な  
のだが、日常的な事件を絶えず歴史的な  
文脈から理解しようとし、「潜規則」が  
もつ歴史的重みについて言及している  
点。魯迅や胡適、林語堂などの社会主義  
革命前の知識人の発言がしばしば援用さ  
れ、現代中国における「潜規則」が、偶  
発的かつ短期間のうちに生まれたもので  
はないことが強調されている。

ところがそれゆえ、「だから中国はダ  
メなのだ」といった印象を読者に与えて  
しまう可能性がある。筆者自身、中国を  
観察しつつも中国の未来を決して否定・  
悲観しておらず、「潜規則」にチャレン  
ジしようとする人びとに温かいまなざし  
を向けているのだが、さて本書の読者も  
同じ感情を抱くかどうか。読者の感じ方  
次第では、本書が一方的な中国異質論だ  
と判断されてしまいかねない危険性があ

## 中国研究所 会員制度のご案内

当研究所は、中国およびアジア諸国との友好を願う立場から、現代中国の政治、経済、社会、文化、歴史を科学的に研究する民間研究機関として、1946年1月に創設されました。以来今日にいたるまで、出版物の編集発行、図書館の運営を活動の柱として、歴史を重ねてきました。

中国研究者および広く中国に関心のある方々の参加と交流を目的とした個人向けの研究会員制度を設けております。是非この機会にご入会ください。

60年以上の歴史を有する研究所として、会員の皆様により充実したサービスを提供できるよう努力してまいります。

なお、2010年12月1日付で、「社団法人」から「一般社団法人」へと移行しました。名称は変更いたしますが、事業内容等に変更はありません。今後ともよろしくお願い申し上げます。

### 【研究会員】

会費: 9,600 円(1年間)

学生会員: 5,000 円(1年間)

### 【会員特典】

- ・当研究所発行の学術月刊誌『中国研究月報』の無料配布
  - ・当研究所主催の公開講座等の参加料割引
- 詳細はお問い合わせください。

## 一般 中国研究所 社団法人

〒112-0012

東京都文京区大塚 6-22-18

TEL: 03-3947-8029

FAX: 03-3947-8039

e-mail: c-chuken@tcn-catv.ne.jp

URL: <http://www.soc.nii.ac.jp/ca/>

る。

こうした危険性があると判断するもう一つの、そしてより重要な理由は、筆者の考える「潜規則」のメカニズムや具体的な顕現が本書の途中で拡大してしまう点にある。

最初のうちは、中国社会に深く根づく「官本位」と「関係と面子の優位」を軸に「潜規則」を描いており、それは相当程度成功していると思うのだが、たとえば第八章では道德主義的文化、第十二章では漢族／非漢族といった、この二つの概念とは関係なさそうな現象が扱われており、何をもって「潜規則」の構成要素とするのかがわかりにくくなっている。

となると、中国で生じているおおよそす

べての事件が「潜規則」によって説明されることになりかねない。

せっかく、「潜規則」というキーワードで中国社会を読み解こうとしているのだから、その射程(どのような集団の、どのようなルールなのか)を限定するか、意識的に明示した上で、事例を吟味すべきではなかったか。そうした感想が、評者が研究者であるというバックグラウンドと関連していることはわかっていながらも——そして本書のよさが、フットワークの軽いジャーナリストによって書かれた点にあることは認めても——、この点が気になった点は正直告白しておかねばならない。

それにしても、中国を論じるのはむず

かしい。外務省OBや安全保障関係者の「対話」にならない一方的な「中国攻撃」を目撃したため、余計にそう感じてしまう自分がいる。(そのだしげと 東京大学)



### 月刊「東方」の定期購読をお薦めします

■ A5判・本文六四頁／毎月五日発行

■ 年間購読料一、〇〇〇円(税・送料込み)

■ お申込は郵便振替(〇〇一四〇一四一〇〇一 株式会社東方書店)まで。ご住所・お名前・何月号からご希望かを明記。

■ Fujisan.co.jpにて、「東方デジタル版」が購読いただけます。 <http://www.fujisan.co.jp/magazine/1281690377>